

大きな魚をつろう！生活単元学習 特別支援学級 1・2・4 学年
七尾市立能登島小学校・教諭**1 事例の概要**

本学級は、1・4年生の女子2名、2年生の男子1名の知的障害児3名のクラスである。学習面・生活面においては、一人一人異なる実態があり、ニーズもそれぞれである。様々なルールを理解し、身に付ける必要があり、自分らしい楽しみをもって生活したいという願いをもっている児童。作業や操作を学習に多く取り入れ、生活に活かせる力を身に付けることでさらなる向上が期待できる児童。何をすればよいかやなぜそうなるのかを理解し納得すること、また、自分の思いを伝えるために、語彙を増やすことが大きな目標であり、活動を通して物や動きなどの言葉や文字を知ることがつきたい力となる児童。

そこで、「一人一人のニーズに応じる指導をするために何を大切にしなければならないか。」「子どもの主体性を支えるために、何が必要か。」また、「主体性を支えるために、題材の選定にあたって、何を重視するか。」を考え、取り組んだ。

A-1 一人一人のニーズに応じる手立て**2 実践内容****(1) 単元の目標**

- ・ 協力して楽しく魚つり大会の準備ができる。
- ・ 見通しを持って、一つ一つの活動に取り組むことができる。
- ・ 物や人を意識して見たり、友だちやいろいろな先生と触れ合ったりすることを通して、身近な環境に主体的にかかわることができる。

(2) 指導上の工夫点① 子どもの実態や思いを生かした取り組み

学年が異なり、学習内容や生活体験、生活状況もそれぞれ異なっている3人が同じ学習の中で自分の思いを持ち、それを実現していくためには、「～したい。」という個々の願いを学習の中心に位置づけることが必要と考えた。さかなつりを素材として取り入れることで主体的な学習を行うエネルギーになることを期待した。

② 一人一人がより力を発揮できるように、子どもの能力にあわせて教材教具を工夫

長さ比べに関して、個々の力はそれぞれ異なっている。そこで、それぞれが身につけている力を活かして長さ比べを自力解決できるような教材教具を作成した。

③ 意欲的に取り組めるように、単元の初めに関連した活動を

海や魚が身近にある環境とはいえ、子どもたちが実際に目にする魚の種類は限られている。そこで、本単元の始めにいろいろな魚を見たり、触れ合ったりすることでより魚に対する興味を高めることをねらい、校下にある水族館を見学し、動機付けとした。

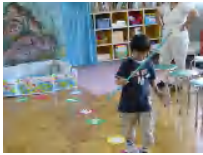
④ 見通しを持てるように、これからの活動を話題にして

本時の活動の見通しを持てることが、子どもの学習意欲の高まりや動機付けにつながると考えられる。そこで、学習の導入時に、大きな魚をつろうとしている子どもが主人公の絵本の読み聞かせを行い、意欲を高めるとともに、大きさについての意識付けをもねらった。

⑤ 満足感・成就感を味わえるように

自分が釣った魚の点数に応じた金額のお金を手にすることができる活動も取り入れた。子どもの意欲を持続させるため、スモールステップで活動を構成していく必要があること、また、お金の出し方について指導を始めるのに良い時期であること、お金の換算できたことが、お菓子をゲットできることにつながるという達成感が得られるということなどから、2つの学習活動を設定し、どの子どもも満足感を持って学習を締めくくることができることを期待した。

3 指導の実際

	学習活動（配時）	児童の活動 願う姿 ①1年生 ②2・4年生	・支援 ☆評価 ○留意点	教材・教具等
深 め る	4. 魚つりをする。 (1) 魚の大きさを比べる。 (15分)	①大きさを比べることができる。 ・1番大きいのはどれかな。 ・2番目はどれかな。 ・3番目はどれかな。	・活動が停滞している場合は少し様子を見て、なぜ停滞しているのかを見極めた上で、声をかけたり、一緒にやったりして集中できるように促す。	魚つりセット 
	(2) 大きさを記録する。	②正確に測ることができる。	・測定器を使い、目盛りが読みやすいようにする。 ☆自分の力で、大きさを比べられるか。〈課題解決能力〉	測定器 

C-1 指導案

C-2 指導の工夫と実際

4 成果と課題

(1) 成果

- ① 児童の興味関心を把握し、それに応じた体験活動を設けることができ、そのことによって、どの子ども、学習に意欲的に取り組むことができた。
- ② 児童一人一人の思いや願いを生かした体験活動を取り入れたことにより、学ぶ場の設定を意図的に行なうことができ、どの子どもも集中して授業に取り組むことができた。
- ③ 個々のニーズに応じた教具や活動を工夫し、繰り返したことで、一人ひとりにつけたい力を身につけることができた。
- ④ 児童自身が自分の活動を自覚し、行動することができ、同時に教師は見通しを持った指導や支援を行うことができた。
- ⑤ 子どもの特性に応じた多様な活動や指導方法に取り組むことができ、子どもたちへの声かけや支援に生かしていくことができた。

(2) 課題

- ① 教材教具に頼りすぎて、大きさを捉えるための比較の方法を指導していくことが足りなかった。個々に応じた方法を用意し、適宜、支援していくことが必要である。
- ② お金の換算の基となる十進法について、教科の中でしっかり定着を図っていくことを同時に行っていく必要がある。
- ③ お互いのがんばりや良さ（特性）が相互に意識化できるように、場を設けて指導していくことが一人一人の自己有用感につながる。

D-1 成果

5 その他 参考文献：「障害児のための個別の指導計画・授業案・授業実践の方法」（黎明書房）